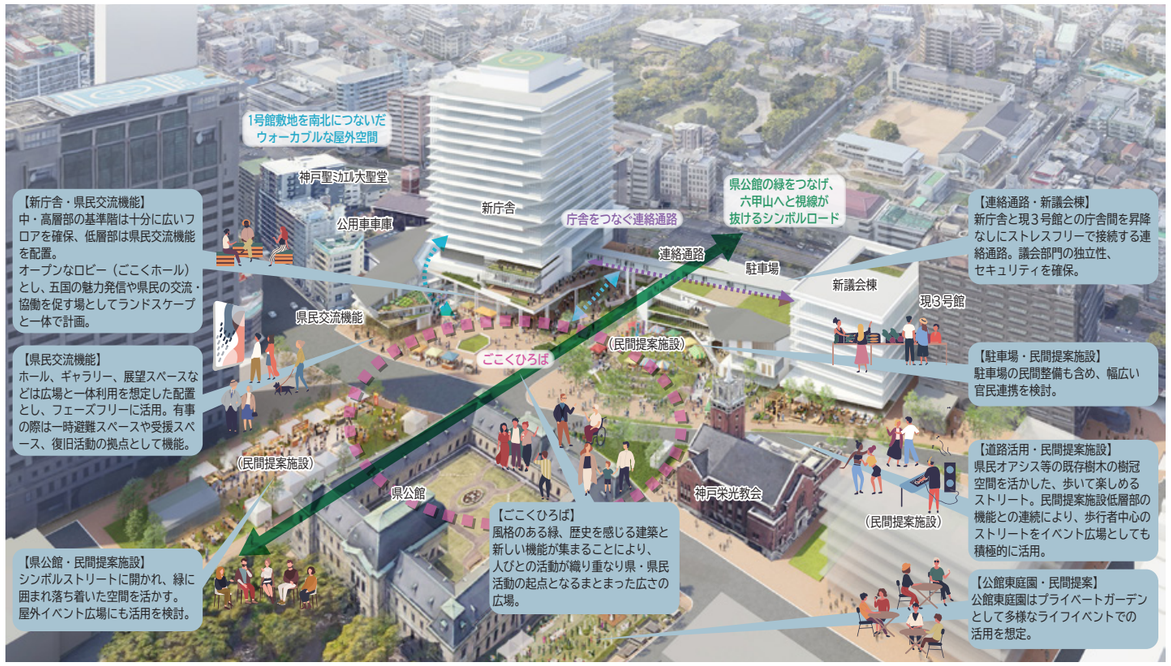
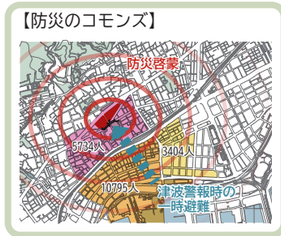
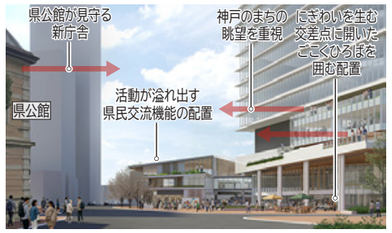


「オープンコモンズ・ひょうご」

ひょうごビジョン2050に示された姿・マインドを踏まえ、新しい県庁舎は公益に対して広く県民が関わり、県民・行政がともにつくり支え合う「新世代の県行政」が生まれる場と捉えました。
県政、県民活動、県経済にみんなが積極的に関わる、場所（ハード）・仕組み（ソフト）・手段（DXなど）を備えた「オープンコモンズ・ひょうご」を提案します。





県庁舎等の整備の考え方

５つのCOMを実現する庁舎づくり

COM-pact	県民の負担を最小化するコストコンパクトと、県中枢機能の両立
COM-munity	居住者、来街者を呼び込み、県民活動の起点となる場と動線づくり
COM-fort	働き心地、居心地、景観エンゲージメントにより、人も街も心地よくする庁舎
COM-municate	五国を繋ぎ、県民を支え、執務環境とセキュリティを向上するDX提案
COM-mit	高い防災性能と環境性能で県民に安全・安心・持続可能な未来を約束

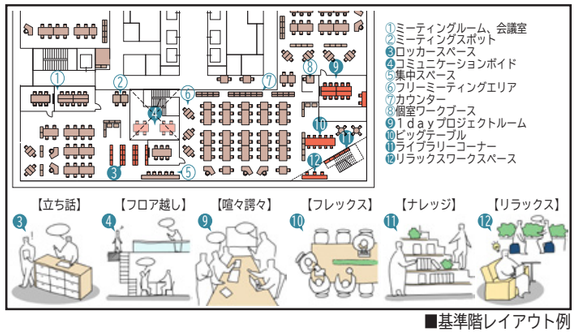
行政と県民の連携、五国の魅力発信

- ●県民・職員いずれも活動がしやすく、相互の場と活動が有機的に連携する、新しい県庁舎を目指します。
- ●新庁舎低層部は、多機能スペース、メディアウォール、屋内外をつなぎ座れる大階段などの仕掛けを提案し、行政・県民・五国の共創と発信の中心拠点を目指します。

■県庁１階のロビー（ごこくホール）は県と県民をつなぐ活動の場

新しい働き方・災害対応をDXなどにより最適規模で実現

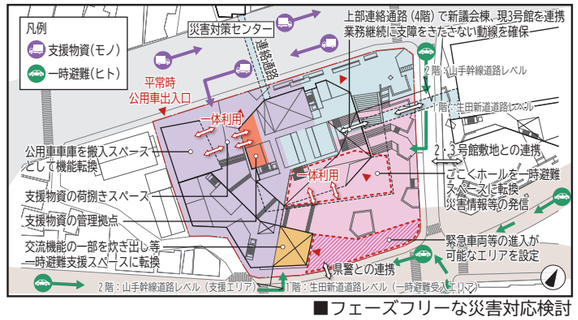
- ●ワークプレイスとスペース計画をABW導入・DX活用で再構築、規模の最適化と生産性向上を両立します。



■基準階レイアウト例

人・物資の移動と連携を支える、空間・動線・フロア計画

- ●南北を通る緊急輸送道路からの動線と活動空地を確保し、災害時にも利便性の高い庁舎をつくります。
- ●中圧ガス・電力・衛星通信など信頼・復旧性の高いインフラ導入を図ります。



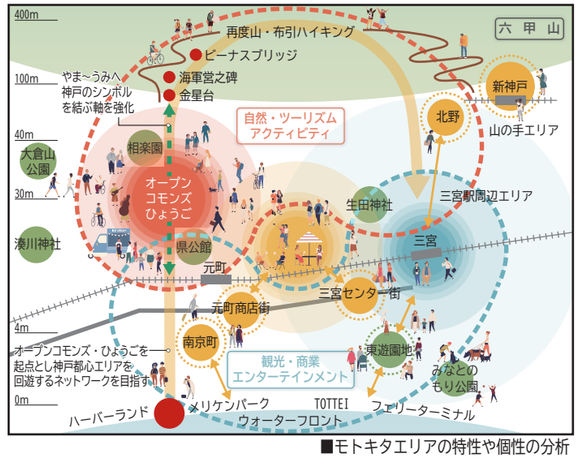
■フェーズフリーな災害対応検討

モトキタエリアのにぎわいづくりの考え方

モトキタエリアの個性を活かしたにぎわいづくりの方向性

- ●まちの方向性を具体的な要素（=圏域・コト・とき）に分解して、モトキタのにぎわいづくり・機能の方向性を提案します。

【圏域】	【コト】	【とき】
地域から広域まで多様な人々が自然に交わり、集い、つながっていくインクルーシブなにぎわい	日常の中に非日常の体験や発見が重なり、立ち寄りと滞在が生まれるにぎわい	時間の重なりや変化を受け止め、現在から未来へ価値が積み重なるにぎわい
地域：周辺居住者、通勤・通学者が日頃心地よく過ごせるにぎわい	くらし：日々の暮らしを支え、新たな刺激がもらえる日常のにぎわい	むかし：県公館、教会、元町の街並みや北野の歴史が受継がれる落ち着きのあるにぎわい
市域：元町・三宮の来街者が足を運びたくなる回遊のにぎわい	なりわい：ひょうご五国の多様な産業の現状や変化を体感できる活動の機能	いま：日々の暮らし・なりわいや県政の動静など、今の動きを知れる学びのあるにぎわい
県域：ビジネス等の目的来訪者が滞留できる機能	出会い：さまざまな「もの・こと」を通して人が交わり、発見が生まれるにぎわい	みらい：新たな価値観創造に挑戦し、前向きな変化を生み出す更新型のにぎわい
広域：居心地よく長期滞在につながるにぎわい		



■モトキタエリアの特性や個性の分析

エリアの人流、人口分析

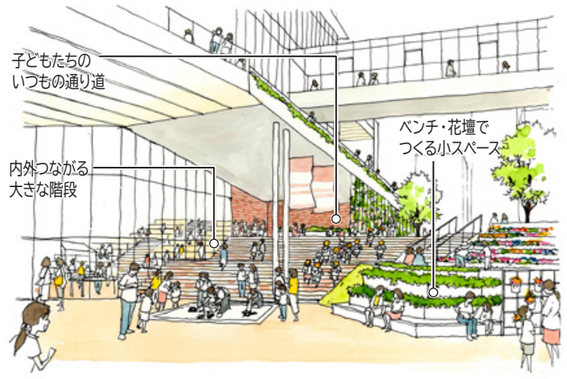
- ●平日は“来街者の滞留性強化”、休日は“来街者の吸引”が必要です。各地点での人流分析により、主要ターゲットも含めて明確化し、機能検討の参考とします。

機能検討のアプローチ

- ●「理想型」「課題型」「比較型」「市場型」の４つのアプローチで、強化すべき機能や新たに取り入れる機能を導き出します。

高低差を活かしたウォーカブルな環境

- ●南北５mの高低差をつなぐ大きな階段やベンチ・花壇・緑を法面処理など、大小の多様な滞留空間で庁舎内外や道路を有機的につなぎます。



■南北の高低差を活かしたランドスケープ